



障害児学校部ニュース⑤

2025 年 8 月 22 日(金)

広島県内の障害児学校にお勤めのみなさん、こんにちは。

8 月 19 日（火）に、広島市東区民文化センターで第 51 回障害児学校部夏季研修会を開催しました。午前中、2 つの分散会に分かれてのレポート検討、午後からは、東京大学大学院教育学研究科教授の小国喜弘先生をお招きし、「インクルーシブ教育の視点から、特別支援教育はどう変革すべきか？」と題して講演をしていただきました。県内各地から参加された皆様、ありがとうございました。

今回は、小国先生の講演会の報告をします。



はじめに小国先生は、1990 年代終わりの是正指導を引き合いに出され、「広島の教職員は是正指導の矢面に立たされ弾圧されてきた。そして、その中にあっても、子どもたちの教育や先生たちの尊厳を守ろうと闘ってきたことが、インクルーシブな空間を作ることとすごく重なっている。だから広島の特設支援学校の教職員たちは、インクルーシブ教育にこだわるのだらう」と小国先生なりの解釈を述べられました。（ここで言う国際基準のインクルーシブ教育は、文科省や県教委の言う「インクルーシブ教育システム」とは異なります）

インクルーシブ教育とは、「地域で共に学び共に育つ」いわゆる統合教育で語られることが多いですが、小国先生の考えるインクルーシブ教育とは、もっと広く、「共に生きるインクルーシブな社会の実現」というイメージです。「インクルーシブな学校を作るとはインクルーシブな社会を作る原点」とのこと。だから「地域の学校で共に学ぶ」ということのみにフォーカスするのではなく、人権の問題として捉えるべきだと言われました。「一人ひとりの声が尊重されているのか？」が重要な視点だと。

これまで、私たち障害児学校部は、地域から分けられた子どもたちを目の前にして、インクルーシブ教育をどう考えればいいのかと、なかなか答えが見出せずにいました。ところが、障害者の問題を人権の問題と捉えんとするなら、私たちが日々悩みながら校内で生徒同士を繋げようとしていることも、生徒が自分の気持ちを伝えることができるように取り組んでいることも、全てはインクルーシブ教育につながるものだと感じました。

小国先生は、特別支援学校でインクルーシブ教育を推進するための多くのヒントをくれました。「医学モデルから、社会モデル、人権モデルへ転換すること」「最適な発達への支援から、その子が自分の気持ちに気付き、それを表明できるための支援へ」「授業中心の発想から生活中心の発想へ」「リスク管理の発想からトラブルから学び合う活動の重視へ」などなど、どれも今の学校の「当たり前」を見直す重要な視点です。

私たちは特別支援学校という枠組みの中で仕事をしています。当然、学校の規定やさまざまな縛りの中で、やりたい事ができないということも多いでしょう。でも、その中で「自分のできることを精一杯やりたい。そして、それは目の前の生徒の人権や一緒に働く人の人権を守る取り組みでありたい。」そう思います。

一度きりのかけがえのない人生をより豊かにするために、人に頼ったり頼られたりという当たり前のことが保障されるクラス・学校をめざして、できることから進んでいきましょう！それが特別支援学校でできるインクルーシブ教育なのだという自信をもって。

